

紺碧海岸

松本 隆



集英社

紺碧海岸

松本
隆

集英社

紺碧海岸 こん ぺき かい がん

一九九二年七月一日 第一刷発行

著者 松本 隆 まつもと たかし

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇

郵便番号 一〇〇―一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作課 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次 ● 紺碧海岸

I 紺碧海岸



.....
7

II 永遠の一瞬、
一瞬の永遠



.....
37

III アリゾナの
決闘



.....
61

IV 止まらない
夏



.....
89

V
マニクールの壁



.....
115

VI
風になった少年



.....
141

VII
イカロスの叫び



.....
163

VIII
喜望峰



.....
215

●紺碧海岸●

●装釘——奥村 靱正

●編集協力——K & K 事務所

I

紺碧海岸

深い海底のような蒼い空に、絹の雲が流れていった。

湾曲した入り江に向かって、雪崩れるように小さな都会が崖を覆っている。その揺り鉢の底のほうから、爆音は市街の壁にぶつかり渦巻きながら立ち上ってくる。

音の暴力が風景を熱くしていた。

峠の見晴らし台にバイクをとめて、ぼくはそのパノラマに見とれた。一八〇度の視界を手に入れるためには、柵の前に立ちふさがる人の列をかきわけなければならなかった。水平線に白い帆船が模型のように浮かんでいる。街に面した港には帆をたたんだ船とクルーザーがぎっしりと肩を寄せて碇泊していた。

太陽の光に眩んだ目を街に移す。くすんだオレンジ色の壁と緑の窓。それがこの街の基調色だ。

建物の透き間に覗く道路を小さな点が動いている。針の尖端ほどの走る機械が大地を揺るがす爆音を奏でていた。

空気を引き裂くような音が、人の血管の中の温度まで上げるに違いない。

早く丘を下ろうと、急に振り向いたとき、肘が何かに触れた。

「あつ」と声がして、斜め後ろに立っていた女の子の手の手のコーラがこぼれた。

「バルドン」と口ごもると、いいのよ、という風に手を振りながら彼女は走り去った。黒い髪に黒いサングラス。国籍が読み取れない東洋系の顔立ちがモータードライブのカメラで撮った連続写真のように瞳に残った。

その背中の向こう側で、塗装のかなり傷んだMGに乗った男が、「早くしろ」と英語で怒鳴っていた。男の声の裏にまで疲れが染みこんでいた。

クロームメッキに光を反射させながらMGは遠ざかった。ヘルメットをかぶりながら、彼らもああして、幌をたたんだ車で英国から大陸を横切り飛ばして来たんだなと思った。

ぼくはミラノから来た。工業デザインの勉強をしている友人が綺麗なカジバのバイ

クを貸してくれたので、夜を徹して走り続けたのだ。重いクラッチ・レバーのせいで左手が鉛のように硬直していた。

グランプリを見るために、ヨーロッパ中から車とバイクが集まって来るんだろう。

車の長い列が丘のふもとまで続いていた。

ただでさえ狭い道なのに、透き間もなく駐車した車と渋滞している車をかわして走るのはしんどい。それでもさっきのMGにすぐに追いついた。

擦り傷だらけの塗装だが、エンジンには手を入れているのだろう。こういう車と競り合うと危険だった。廃車寸前とあなどると痛い目にあうことがある。長旅でフロント・ガラスは汚れ、ボンネットも埃を被っていた。

強い太陽に射られて、彼女の髪は黒耀石のようにつやめいていた。ドアの上から突き出した肘が細い。

ブレーキが鳴いたとき、彼女がこっちを向いた。

ヘルメットを縦に振って深い意味もなく挨拶した。

前が空いたので、MGを抜き去りながら、バック・ミラーの中で、彼女が身を乗り

出して目で追うのを見た。ハンドルを握る男は何も気付かない。

彼女とのささやかな共犯関係が芽生えたような気がした。

駅前広場から港に下る小路の左側に無数のバイクが並べられていた。騎兵隊の馬のように整然と、機械たちは息をひそめている。

苦勞して見つけた間隙にバイクを滑り込ませると、ふと空腹を感じた。無理もない。トリノを過ぎたあたりの、アウトストラード沿いにあるドライブ・インで、石のように固い生ハムのサンドイッチを食べたのが最後だったから。

目の前にカフェがあった。舗道に面したテラスが気持ちよさそうだ。

ヘルメットを抱きながら店に入ると、太った男が出てきて、窓際の席はないと言う。困り顔で店内を見回すと、運よく一番奥のグループが席を立つところだった。それを無言で指さした。太った男は、肩をすくめて、片付けるから待てという動作をした。イタリア語とフランス語が半々に聞こえるこの街では、話すよりも身振りのほうが手っとり早いらしい。

小路の反対側は、グランプリのチーム名を刷り込んだシャツや日傘を売っている露店で華やいている。露店といっても、トラックのコンテナを改造した豪華なものがほとんどで、レースが終了すると同時に、車を連結して次のサーカスの開催地に向かうのだろう。

通りは人でごった返していた。

短パンに原色のシャツ。それにフェラーリの赤いキャップを頭にのせるといった風情の若者が目立つ。蜜蜂が人波を縫いながら飛んでいた。

グラス一杯の白のハウス・ワインに、あさりのスパゲッティを注文すると、料理はそれほど待たずに出てきた。

MGが人混みを割って入ってきた。トランシーバーを持った警官が走り寄って注意をしている。Uターンをしろと言っているらしい。

男は大げさな身振りでハンドルを両手で殴りつけ、後ろを振り返り、「こんなところでどうやって戻れっていうんだ」と英語でわめいた。警官は無表情な顔で威圧しながら、後方を指さした。

助手席の彼女は、あきらめと苛立ちと恥ずかしさを混ぜたような顔色で俯いていた。その横顔を見ているうちに心臓の鼓動がわずかに速くなり、何かを教えたがっているようだったが、ぼくにはその理由がわからなかった。

まあいい。ぼくは自分の皿に視線を戻して、フォークにスパゲッティを巻きつけた。

店を出ると、階上が二つ星のホテルになっているのに気付いた。右手に小さなドアがある。中に入ると、左手のカウンターで中年の男が新聞を広げていた。

「部屋はあるかい」ぼくは聞いた。

「あるわけないね」彼は首を振った。

両手を広げて、帰ろうとすると、「明日はキャンセルが出るかもしれないから、明日もう一度来るといいよ」と言った。

新聞をたたんで、「レースが終わると、その日のうちに帰りたがる客が、毎年、必ずいるんだ」とつけ加えた。

「そうだろうね。特にひいきにしているチームが負けるとね」ぼくは答えた。